

呼吸器腫瘍内科

(スタッフ)

部長 : 森永 亮太郎
副部長 : 久松 靖史 (4月から)
主任医師 : 久松 靖史 (3月まで)
嘱託医 : 駄阿 徳太郎 (3月まで)

2014年の診療科開設以来、徐々にスタッフも増え、一時期は3人体制で診療しておりましたが、2022年4月からは森永、久松の2名で診療にあたっています。

(診療実績)

2022年の入院患者数は延べ304名でした。ここ数年と比較するとやや減少しておりますが、診療スタッフの減員に加え、コロナ禍がもたらした一般病床の入院制限も影響していると推測されます。入院患者の内訳は例年と大きな変化はなく、肺がんがそのほとんどを占めており、肺炎(がん治療中に併発)、胸腺/胸膜悪性腫瘍、原発不明がん、その他のがん腫が続くかたちとなっています(図)。

外来患者数は延べ3,455名でした。当科の化学療法件数の7-8割が外来での治療となっており、外来患者数は診療科の開設以降右肩上がりでした。しかしながら、2022年は約500名減少し、2021年とほぼ同数でした(表)。COVID-19の感染蔓延期には受診間隔を極力あけるなど、こちらもコロナ禍による一定の影響があったものと思います。

当科では、手術による根治治療が難しい進行肺がんの患者を主な対象として薬物療法による治療を中心に診療を行っていますが、進行期のがん患者は痛みをはじめとしたさまざまな苦痛を抱えておられます。当科の医師2名は「緩和ケアセンター」のスタッフを兼任しておりますので、患者の抱える苦痛を極力軽減し、より有意義な時間を過ごしていただけるように、同センターのスタッフと協働しながら緩和ケア診療をがん治療と並行して提供できるように努めています。また、年に一回開催している緩和ケア研修会では、当科スタッフはファシリテーターとして参加しており、若手医師(特に研修医)を中心とした医療従事者に緩和ケアへの理解を深め、さらには実践していただけるよう励んでいます。

他のがん腫と同様に肺がん領域におきましても免疫療法をはじめとした多くの新薬が臨床現場に導入されており、「診療ガイドライン」の改訂も頻繁に行われています。そのような状況のなかで、一人一人の患者に最適な治療を届けることができるように心

がけています。

(今後の方向性)

肺がんに対する薬物療法の成績は、新薬の臨床導入により徐々に改善されつつありますが、未だ満足できるレベルには至っておりません。私どもは西日本がん研究機構(WJOG)や九州肺癌機構(LOGiK)といった臨床試験グループの一員として臨床研究に携わっています。微力ではありますが、将来の新しい治療法の構築に尽力していきたいと考えています。

また、当院は2021年に「がんゲノム医療連携病院」に指定されております。新しいがん治療に施設全体で取り組んでいくなか、私どもも他診療科・スタッフと力を合わせて、よりよいがん医療を提供できるよう尽力していきます。

(文責: 森永亮太郎)

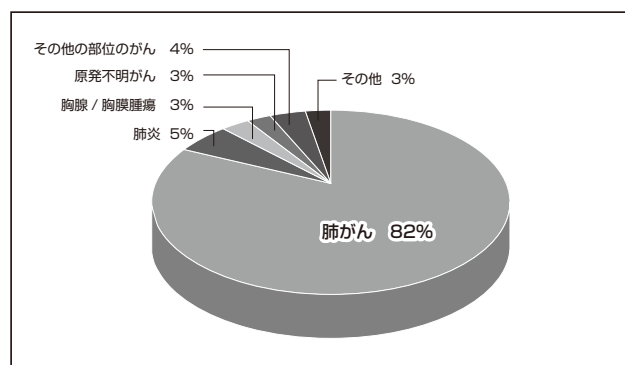


図 2022年 入院患者内訳

表 診療実績の推移

年	2019年	2020年	2021年	2022年
入院患者数 (延べ数、人/年)	334	381	383	304
平均在院日数 (日)	13.8	12.6	10.8	11.6
外来患者数 (延べ数、人/年)	2,649	3,434	3,928	3,455